

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	尾崎 萌子
主 論 文 題 名： Cultivating Empathy: A Cross-Cultural Analysis of Language Socialization Through Picture Book Reading Practices (共感の社会的生成：絵本の読み聞かせを通した言語社会化の対照分析)				
(内容の要旨) 感情は、日常生活を通じて誰もが経験する現象であり、人間社会の基礎を形成するとともに、個人のアイデンティティや人間関係の構築にも不可欠な要素である。先行研究によれば、乳幼児は生後すぐの段階であっても、自己や周囲の人々の感情に対してすでに極めて敏感であることが示されている。同時に感情は社会的構築物であり、親などの身近な他者との相互作用を通じて発達する。したがって、感情の獲得過程においては、文化的背景が重要な役割を果たす。 感情の中でも、社会的感情に分類される「共感」は、社会との関わりの中で身に付く感情とされている。しかし、共感が言語を通じた相互作用の中でどのように獲得されるかに関する研究は、依然として不十分である。特に言語間の対照分析に着目した研究は限られている。 研究が進展しない背景には複数の理由が考えられる。第一に、当該研究の分析を行うためには子どもの日常会話の動画を収集する必要があるが、日本を含む一部の文化圏では親が子どもの動画を研究目的で提供することへの抵抗感を持つ家庭が多く、子どもを対象とした定量的な研究の実施が困難であること。第二に、対照研究を行うためには、関係する両言語及び文化に関する深い理解が必要であり、これが障壁となること。第三に、感情に関する言語学的研究は比較的新しい領域で、知見が未熟であること。社会における感情の文化的構築や言語を介した伝達に関する研究は、キャサリン・ルッツやジェフリー・ホワイトといった人類学的言語学者が研究し始めた1980年代以降から、まだ40年程度の浅い歴史しかない。 このようなリサーチギャップに基づき、本論文では、子どもの情緒的発達において、日本とアメリカの文化的規範がどのような役割を果たしているかを調査する。特に、日本人とアメリカ人の親が子どもの共感性を育むためにどのように言語的営みを行なっているかに焦点を当てる。研究の中心的な疑問は、(1) 日本人とアメリカ人の親が示す共感性のレベルに差異が存在するか(2) 日本人とアメリカ人の親が子どもに共感性を培うために採用している方略がどのようなものかであり、これを明らかにすることを目標とする。 先行研究によると、日本人は対人関係、共感、集団の結束を重視しており、間接的なコミュニケーションによって社会的な調和を促す。このアプローチは、母親が子どもに話しかける際に命令文よりも平叙文を好むことから見て取れ、子どもは早期から間接的なコミュニケーションに触れることになる。これに対し、アメリカ人は自立、意見交換、直接的なコミュニケーションの促進を重視している。アメリカ人の母親は自己肯定感や自立心の育成に向けて言語を主に情報交換の手段として使用し、子どもの問題解決能力の向上に努める傾向があるとされている。 このような日米での社会的実践の違いはあるものの、日本人の親もアメリカ人の親も、子どもに教育を施す際には子どもの現在の発達水準と潜在的な発達水準との間の範囲、つまりZPD（発達の最近接領域）内で、子どもが課題を達成できるようにサポートすることが一般的であると考えられている。この領域での親による子どもへのサポートは「足場作り」「足場掛け」と称される。しかし、この足場作りが直接的に観察可能なタスクのみならず、情動の社会化にどのように影響				

を与えるかについては、文化の違いを超えた詳細な検討がまだ行われていない。言語社会化に関する異文化間研究の知見は依然として不足している。

この研究ギャップを解決するため、本研究では日本とアメリカの両国でコンテキストが統一されたデータを扱い、親が子どもに対して ZPD の範囲内外でどのような足場掛けを行なっているかを分析した。分析に使用するデータは絵本の読み聞かせ動画に統一した。絵本の読み聞かせは、識字社会において広く行われている活動の一つであり、日本とアメリカでも多くの家庭で親子間の豊かな関わりの場となっている。日米の両方において絵本の読み聞かせが子どもの言語発達に有益であると広く信じられており、実際に多くの研究が、絵本の読み聞かせが新しい語彙、文法、読み書き能力、言語能力、共感能力の習得を促すことを示している。さらに、親をはじめとした養育者が会話の規範を子どもに伝える手段ともなっている。

これらの背景から、絵本の読み聞かせは、日本とアメリカの家庭において子どもの情緒発達における足場作りの違いを探るに適した方法であると考えられた。本研究は、0 歳から 7 歳までの子どもに対する絵本の読み聞かせの中で情動の社会化、とりわけ共感の社会化がどのように行われているかを分析した。

第 4 章では、第 1 の研究として、日本人家庭とアメリカ人家庭の親が絵本の読み聞かせを通じて子どもの情緒的準備態勢 (emotional readiness) をどのように整えるかを調査した。0 歳 2 ヶ月から 4 歳 11 ヶ月の子どもを持つアメリカ人親子 165 組と日本人親子 105 組を対象に、アメリカ人親子には *The Very Hungry Caterpillar* (Carle, 1969) を、日本人親子にはその和訳版『はらぺこあおむし』(カール、1976) を自宅で読み聞かせる動画の撮影を依頼し、さらに読み聞かせの頻度、子どもの年齢・性別、親の学歴などに関するアンケートに回答を求めた。動画データは文字起こし後、MAXQDA を用いてテキスト外の発話を発話単位でコード付けし、SPSS で統計処理を施した後に質的分析を行った。コード付けの発話単位は、子どもの発話の不完全性を考慮し、会話分析で広く用いられている Brown et al. (1984) の Phrases and Clauses Unit ではなく、一つの考えを一つの発話とする Kroll (1977) の Idea Unit に基づいて行った。さらに、親のなりきり発話 (例えば「お腹痛いよー」のように、絵本の登場人物になりきって行うテキストにない発話) および絵本の読み聞かせ後に子どもに感想や意見を尋ねる質問 (「どうだった?」「おもしろかった?」など) もコード付けした。

その結果、顕著な文化的差異が明らかになった。特に乳幼児との相互作用において、日本人の親は足場作りの手法としてなりきり発話を積極的に使用していたことが分かった。量的分析の結果、日本人の親のなりきり発話は乳幼児期に最も頻繁に行われ、子どもの年齢が上がるにつれて徐々に減少し、5 歳になるまでにはほぼ使用されなくなることが判明した。

なりきり発話は、幼い子どもが絵本の登場人物の視点を理解し、その感情に共感するための手段として機能する。例えば、例 1 では「そのぼん、あおむしはおなかがいなくてなきました」という絵本の一節を読んだ後、母親が「えーんえーん、お腹痛い。泣いてる。えーん、えーん、えーん。」となりきり発話を使って泣き真似をすることで、あおむしの物理的な痛みよりもその心情に焦点が当てられる。このように日本人の親は、なりきり発話を多用することで間接的な表現、共感的な表現、社会的なルーチンを強調し、社会での共感や協調性を育成していることが示された。また、子どもの年齢が上がるにつれて親のなりきり発話の頻度が減少することは、子どもの言語能力や認知能力の発達に伴い、足場掛けが段階的に引き下られることを示唆している。一方、アメリカ人の親によるなりきり発話の使用は日本人の親の約半数に留まった。

例1：日本人の親による『はらぺこあおむし』の読み聞かせ（子供の年齢=3歳9ヶ月）

- 1 MOT: そのばん あおむしはおなかがいなくてなきました。
2 えーんえーん、お腹痛い。泣いてる。えーん、えーん、えーん。
3 つぎのひはまたにちようび。

一方で、アメリカ人の親は絵本の読み聞かせ後、子どもに感想を求める頻度が日本人の親よりも高かった。生後2ヶ月から子どもに絵本の感想を尋ね始めることがあり、この習慣は子どもの年齢が上がるにつれて徐々に増え、3歳でピークに達し、4歳になると減少する傾向にあることがわかった。最も頻繁に使用されたフレーズは“Did you like the book?”で、子どもの意見を尋ねた親の約半数がこの表現を使用していた。特に興味深いのは、言語発達がまだ未熟な乳幼児に対しても親が同様に意見を求める姿勢が見られたことである。例えば例2では、乳幼児が返答できない場合でも、親は“Was that fun?” “Did you like the book?” “You like seeing all the good? All the caterpillars?” など、さまざまな表現を使って質問を言い換え、子どもの意見を引き出そうとする態度が観察された。

例2) アメリカ人の親による読了後の子どもに対する質問（子どもの年齢：10ヶ月）

- 1 FAT: And... He was a beautiful butterfly! Yayyyy! See his pretty
2 wings? All the colours? The end. Was that fun? Did you like
3 that book, [name]? You like seeing all the food? All the
4 caterpillars? Yeah, that's the sun!

アメリカ人の親が絵本の読み聞かせ後に子どもの意見を積極的に聞く習慣は、アメリカ人の自己表現を重視する姿勢が反映されており、子どもが自分の考えや視点を表現し、共有する能力を育むためのものであると考えられる。この習慣は乳児期から始まり、子どもの成長とともにその意義がより明確になる。特に3歳頃になると、例3のように親が質問を繰り返し言い換えなくとも、初めての質問に対して子どもが自らの意見を述べられるようになる。

例3) アメリカ人の親による読了後の子どもに対する質問（子どもの年齢：3歳1ヶ月）

- 1 MOT: You like the book?
2 CHI: Yeah. Can we read it (0.1) can we read it again?
3 MOT: Again?
4 CHI: Yeah.

このように、発話内容に文化的な差異が認められたが、日本人およびアメリカ人の親はともに、なりきり発話や問いかけを乳幼児期から行い始めていた。乳児はまだ物語の理解能力、現実には存在しない人物の感情を把握する能力が未発達であることから、これらの親の発話が共感や自己表現能力の獲得に直接影響を与えているとは考えにくい。むしろ、乳幼児期から多様な表現に触れさせることにより、これらは将来の相互作用や認知発達の基礎を築く、初期教育の足場作りとしての役割を担っていると考えられる。

もう一つ日米で共通していたのが、3歳という年齢がどちらの文化圏においても重要な節目として浮かび上がってきたことである。日本人の親は、3歳頃からなりきり発話を減らし始める一方で、アメリカ人の親は感想を求める問いかけが3歳頃にピークを迎える。3歳になると、子どもは他者の考えや感情をある程度理解するようになり、自分の感情を表現できるようになる。このような認知機能の発達に伴い、親が足場掛けの頻度を減らしていると考えられる。これらの結果から、日米では親による足場掛けの仕方が異なり、それぞれの文化的規範にあった足場掛けが行われている可能性があるといえる。一方で、その足場掛けを開始するタイミングは日米で一致しており、また足場掛けは子どもの発達水準に適正なレベルを超えて乳児期から開始されていた。

第5章では、第2の研究として、日本人およびアメリカ人の親による文字のない絵本の読み聞かせを分析した。この章では、第4章で得られた分析結果をもとに、以下の2点を明らかにすることを目的としている。(1) 3歳以降、特に子どもが共感力の高まりを示す7歳まで、親はどのように子どもの共感の獲得を足場掛けするのか。(2) 日本人およびアメリカ人の親は、子どもの共感力の発達において異なる目標を持っているのか、あるいは異なる方法を取りながらも最終的には同じ目標に向かっているのか。

調査の対象となったのは、日本語またはアメリカ英語を母語とし、3歳から7歳の子どもを持つ日本人またはアメリカ人の家庭であった。被験者は日本人112名（子供の平均年齢=5.0歳、標準偏差=1.26、最小年齢=3歳0ヶ月、最大年齢=7歳11ヶ月）と、アメリカ人59名（子供の平均年齢=5.0歳、標準偏差=1.39、最小年齢=3歳0ヶ月、最大年齢=7歳10ヶ月）であった。参加者の募集には、SNSを通じた情報の拡散と、友人や幼稚園への直接的な声かけを組み合わせた方法が用いられた。被験者には事前に同意書の提出を求め、その同意を得たうえで、指定の絵本を被験者の自宅に1冊郵送した。調査に使用する絵本には、3歳から7歳までの子どもが理解できる内容であり、また登場人物の感情表現が豊かである *Found*. (Newman & Day, 2018) を選定した。雨の中で見つけた迷子の犬を少女が自宅に連れて帰り、世話をするうちに次第に愛着を持つようになるが、その犬が飼い犬だったことが判明し、葛藤の末に少女が元の飼い主に犬を返すことを決める物語である。

被験者に対しては次の指示を出した：(1) まず、親が一人で絵本 *Found*. を一通り読み、内容を把握する。(2) 次に、この絵本を一度も読んだことがない大人に内容を説明するかのよう、親が一人で絵本の朗読を行い、その様子を録画する。この際、読んでいる内容が子供に聞かれないように注意する。(3) その後、同じ絵本を子供に読み聞かせ、その様子を録画する。(4) Google Forms を通じて事後アンケートに回答する。(5) 録画した動画を研究代表者である尾崎萌子にメールで送付する。読み聞かせの方法やカメラの角度については、可能な限り日常的に行われる自然な読み聞かせを再現できるよう、自由とした。

量的分析により、日本人の親とアメリカ人の親との間で感情に関する言及全体において有意な差は見られなかった。これは、感情表現を感情の認識、感情の理解、登場人物の視点からの感情への言及、共感の表明の4つのカテゴリに分類した場合にも同様であり、日本人の親もアメリカ人の親もほぼ同等の頻度でこれらのカテゴリに属する言及をしていた。特に、親が単独で絵本を朗読する際には、日米間で差が認められなかった。この結果から、絵本の読み聞かせにおける日本人とアメリカ人保護者間での感情移入に関する文化的差異は、従来の研究で指摘されていたほど顕著ではないことが示された。共通の絵本が提示された状況下では、日本人の親もアメリカ人の親も、登場人物の感情を同様に解釈し、同様の共感的反応を示す可能性が高いと考えられる。これは、感情に

関する解釈や表現が文化によって大きく異なるという一般的な見解に対して、ある種の共通性が存在することを示唆している。

一方、親子での絵本読み聞かせに関する質的分析では、親による感情への言及頻度や感情表現の分類別頻度においては日米間で大差は見られなかったが、その表現方法に関しては文化的差異が明らかになった。日本人の親は第4章の結果と同様に、なりきり発話をアメリカ人の親に比べて高頻度で使用し、没入型の感情の足場作りを行う傾向があった。例えば例4では、はじめに親が子どもに「わんちゃん、どんな気持ちかな」と感情の認識を促す質問を投げかけ、子どもが「嫌な気持ち」と応答すると、親は補足する形で「えー。まだ、あなたのことよく知らないし」と、主人公の視点に立ち、犬との信頼関係がまだ築けていない状態をなりきって発話している。

例4) 日本人の親による *Found.* の読み聞かせ (子供の年齢=5歳2ヶ月)

- 1 MOT: わんちゃん、どんな気持ちなのかな。
- 2 CHI: 嫌な気持ち。
- 3 MOT: えー。まだ、あなたのことよく知らないし。

これとは対照的に、アメリカ人の親は、登場人物の感情に焦点を当てた明示的な質問と回答のやりとりを行う傾向が強く、登場人物の感情の認識から始まり、子ども自身を登場人物に投影したり、共感したりするように誘導する、より分析的なアプローチを採用していた。例えば、例5では例4と同様に、まず親が “How does that make the boy feel?” と登場人物の感情認識に焦点を当てて質問し、子どもが犬との再会を喜ぶ少年について “Happy” と答えている。その後、今度は犬を手放さなければならない主人公の感情に焦点を当て、 “How does it make her feel?” と親が子どもに問うと、子どもは “Sad” と正しく回答した。その後、感情の言及レベルを一段階上げ、 “How do you feel?” と子ども自身の感情について質問している。

例5) アメリカ人の親による *Found.* の読み聞かせ (子供の年齢=7歳4ヶ月)

- 1 MOT: Yeah? How does that make the boy feel?
- 2 CHI: Happy.
- 3 MOT: How does it make her feel?
- 4 CHI: Sad.
- 5 MOT: How do you feel?
- 6 CHI: Um, both, kinda.

この違いには、絵本の読み聞かせ中に共感がどのように育まれるかという点での文化的差異が反映されている。その文化的差異として、アメリカ人の親は、共感を育むためには共感の対象に関する論理的な理解が前提となると捉えているのに対し、日本人の親は、共感の対象への理解が不明瞭であっても相手の立場に立って物事を考えることに重きをおく、という日米の親の価値観の違いが考えられる。このことから、日本人とアメリカ人の親が共感を含む感情表現に対して持っているゴールイメージは、同じコンテキスト下であれば似ている可能性があるものの、そのゴールに到達するためのアプローチには文化的な違いがあることが示唆された。

第6章では、第4章と第5章の分析結果を統合し、ZPD および足場掛けの観点から包括的な考察を行い、言語社会化理論への提言を展開した。まず、日米両国の親は乳幼児に対しても、親の援助があっても到達し得ないレベルの内容について積極的に足場掛けを実施していた。このように、ZPD を超えた足場掛けを親が実施しているのは、子どもの発達可能領域が従来考えられていたよりも広範囲にわたること、そして親がより長期的な発達を視野に入れ、早期から文化的規範に即した言葉がけを行っていることに起因する可能性が示唆された。このことは、従来の足場掛けや ZPD の定義では説明できないものである。

これを踏まえ、「二層の足場掛け」(two-tier scaffolding)という新たな枠組みを提唱する。従来の ZPD 内の足場掛けは「実践的足場掛け」(practicality scaffolding)と命名し直し、具体的かつ到達可能な目標の達成を目指す足場掛けを指す。例えば、絵本読み聞かせの場合には、登場人物の感情を理解することができる子どもを対象にした、物語理解や共感を深めるための質問と応答がこれに該当する。一方、乳幼児に対する感情表現の足場掛けなど、親の援助があっても認知的・情緒的に到達し得ないレベルの足場掛けは「事前的足場掛け」(readiness scaffolding)と呼ぶ。事前的足場掛けは直接的な習得を目的とせず、豊富な表現に子どもを触れさせることで、将来的な発達を支援する。このような差別化により、足場掛けの概念は従来よりも広範な発達目標を含むものとなる。

足場掛けの二層化に加え、ZPD の精緻化も必要である。従来の ZPD は、子どもの発達を一方向かつ一元的に捉えており、親の援助があれば子どもが到達可能なレベルか、到達不可能なレベルかのみを ZPD の範囲として定義していた。しかし、認知的・情緒的な発達においては、何をもって習得したとするかが不明瞭であるため、従来の ZPD では捉えきれない側面がある。そこで、本論文では ZPD をより精緻化し、3 つの領域に分けた ARC モデルを提案する (Assisted comprehension, reflective application, and creative engagement (ARC) model)。このモデルは「援助による理解可能領域」(ZAC: Zone of Assisted Comprehension)、「省察による適用可能領域」(ZRC: Zone of Reflective Comprehension)、そして「創造的適用の領域」(ZIA: Zone of Innovative Application)から構成される。

最も内側の核となる領域である ZAC は、養育者の援助があれば子どもが基本的な感情に注意を向け、それを理解することが可能な領域である。ZAC の外周に位置する ZRC は、ZAC で学習した感情に関して、養育者の援助によって他者が特定の感情を持つ理由を省察したり、自分の身に置き換えて考えたりすることが可能な領域である。最外周に位置する ZIA では、それまでに蓄積された認知的・情緒的な理解や知識をもとに、子ども自身が親の援助なしに他者に共感を示すこと、また他者の感情理解に基づいて自己の適切な行動を決定することが可能である。このように ZPD を3つの領域に分けることで、子どもの発達の複雑さと多様性をより詳細に捉えることができる。

二層の足場掛けと ARC モデルの関係性は図1に示す通りである。本論文で日本人の親とアメリカ人の親が同様の頻度で同様のレベルの感情表現を用いていることが示唆されたが、これは ARC モデルにおける各領域の到達目標が日米の被験者で類似していること、またそこに到達するために用いられる具体的な足場掛けの内容や道筋が異なること、の2層の足場掛けで説明することができる。

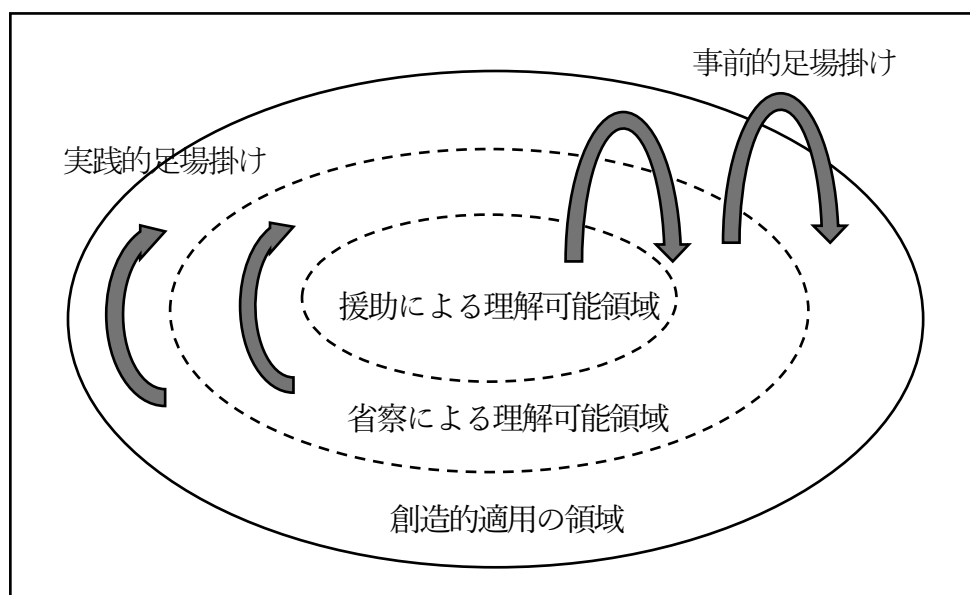


図1 二層の足場掛けと ARC モデル

本研究から導き出された結論およびそこから派生した提言は、言語社会化、特に情動の社会化理論にとって、重要な視点を提供するものであると考えられる。第一に、コーパスの量的分析に基づく分析の有用性が挙げられる。言語社会化論はエスノメソドロジーに起源を持ち、文字起こした会話データを会話分析に依拠して詳細に分析し、発話に内在する文化的規範を明らかにする手法が中心である。このアプローチは、日常会話における文化差を発見するうえでは非常に有効であるが、あらゆる発話を文化と結びつけて解釈してしまうリスクを内包している。本研究で行われたような、大規模コーパスの利用や統計分析の導入により、より客観的な視点からの分析を行うことが可能である。

第二に、ARC モデルを活用することで、一見文化差が顕著な発話内容についても、その文化差が目標そのものであるのか、またはその目標に至る手段の違いによるものであるのかを区別することが可能となる。従来の研究では、日本は間主観性を重んじ、アメリカは情報志向であるといった二元論で語られることが多かった。しかし本研究では、発話の内容や形式には日米間で違いが見られるものの、最終的には共感の獲得レベルやその重視度において日米間で大きな差はないことが示唆されている。この点からも、総体的な目標に焦点を当てた議論を進めるうえで、ARC モデルが有効であるといえる。

第三に、従来の ZPD を超えて親が足場掛けを行っている可能性が示唆されることは、子どもの発達ポテンシャルが従来考えられていたものよりも高い可能性があること、また親がより中長期的な視点で足場掛けを行っている可能性があることを意味する。ZPD を超える長期的な足場掛けの可能性を考慮することで、一見些細な相互作用であっても、文化的差異とは無関係なものとして見落とされがちな発話を見過ごすことなく捉えることができる。このようなより広範な発達の軌跡や総合的な目標に焦点を当てた議論は、情動の社会化理論においても重要な洞察を提供する。このため、二層の足場掛けと ARC モデルを用いた枠組みは、新たな視点を提供していると考えられる。

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number	☐ “KOU” ☐ “OTSU” No. *Office use only	Name	Moeko Ozaki
Thesis Title Cultivating Empathy: A Cross-Cultural Analysis of Language Socialization Through Picture Book Reading Practices （共感の社会的生成：絵本の読み聞かせを通した言語社会化の対照分析）			
Thesis Summary This dissertation investigates the role of cultural norms in Japan and the United States in shaping children’s linguistic and emotional development. In particular, it examines how parents in these countries use verbal interactions to cultivate empathy in their children. Central to this study are two questions: whether there is a difference in the level of empathy exhibited by American and Japanese parents, and how American and Japanese parents assist their children in acquiring empathy. Previous research has highlighted cultural distinctions, noting that Japanese parents tend to emphasize affection and interpersonal relationships, while American mothers focus on information sharing and fostering independence. These practices are believed to involve scaffolding within the zone of proximal development (ZPD), a concept that describes the support that caregivers provide to help children achieve tasks slightly beyond their current abilities but within their potential. However, the specific influence of scaffolding on emotion socialization across cultures has not been thoroughly examined, marking an underexplored area in cross-cultural studies of language socialization. To address these research gaps, the study used picture-book reading sessions as a standardized data collection method. It comprised two distinct analyses examining how emotion socialization was practiced during these sessions with children aged 0–7. The first analysis examined the interactions of 165 American parents and 105 Japanese parents reading <i>The Very Hungry Caterpillar</i> or its Japanese version, <i>Harapeko Aomushi</i> , with their 0–4-year-old children. The results uncovered distinctive patterns of speech: the Japanese parents often employed enactments to foster empathy and social norms, while the American parents typically engaged in question-and-answer sequences to promote their children’s self-expression, even when the children were at an early, preverbal stage. These early efforts suggest that the parents were establishing a culturally specific foundation for speech that is crucial for their children’s later development. It also suggests that parents scaffold beyond the ZPD, implying that children may have more potential for development than currently thought. The second study explored the interactions of 59 American and 112 Japanese parents sharing a wordless picture book, <i>Found.</i> , with their 3–7-year-old children. It investigated how these parents used the book as a tool to foster empathy by discussing the characters’ emotions. The findings revealed no significant differences between the cultures in terms of the frequency and depth of emotional references made. However, the results uncovered distinct approaches in scaffolding techniques: the Japanese parents were more inclined to use enactments, whereas the American parents leaned toward structured questioning. This insight challenges the traditional view of individualism versus collectivism frameworks,			

Thesis Abstract

No. 2

suggesting that parents across both cultures similarly prioritize the development of empathy in their children, albeit through different methods.

The findings from these studies prompted a reevaluation of scaffolding and the ZPD. This dissertation therefore introduces a novel two-tiered scaffolding framework that blends *readiness* scaffolding with *practical* scaffolding to address both immediate educational needs and long-term development goals. It also proposes the novel assisted comprehension, reflective application, and creative engagement (ARC) model, which redefines developmental progressions into three distinct zones that reflect unique stages in children's emotional and cognitive development: the zone of assisted comprehension, the zone of reflective comprehension, and the zone of innovative application. Integration of the two-tiered scaffolding framework with the ARC model offers a holistic view of development that more accurately represents children's varied emotional and cognitive growth trajectories.

The conclusions of this research have significant implications for emotion socialization research. The ARC model and the two-tier scaffolding framework are proposed as a comprehensive approach that respects both cultural differences and similarities in parental scaffolding, which will be useful for contemporary research in language socialization.